

西原土地区画整理事業第Ⅰ工区第13次調査報告書①

なか
中 越 遺 跡

長野県上伊那郡宮田村

1994

宮田村遺跡調査会

西原土地区画整理事業第Ⅰ工区第13次調査報告書①

なかこし
中越遺跡

長野県上伊那郡宮田村

1994

宮田村遺跡調査会

序

昭和31年、宮田村における初めての学術調査が実施されて以来、昭和59年まで14次にわたる発掘調査をしてきた中越遺跡では、昭和62年から、西原土地区画整理事業の進行にあわせて、12回にわたる調査を実施し、記録保存をはかってきました。平成5年度も、第13次調査として、区画整理の第Ⅰ工区内の4箇所で発掘調査を実施しました。この報告書は、そのうちの台地南縁に近い村道775号線付近と、北縁に近い村道26号線から北方一帯の、いずれも道路部分の調査記録です。

調査の結果、村道775号線付近で縄文時代中期の住居址12軒、村道26号線から北方一帯で縄文前期初頭の住居址8軒と、中世の半地下式建物址2棟、掘立柱建物址1棟を発見しました。幅4m程度と調査範囲が限定され、発見されても、その全体を調査できなかつたものが多いわけですが、特に中世の遺構は、15世紀の宮田村に関する初めての具体的資料として、貴重な発見ということができるでしょう。

住民の生活道路を掘り返して調査するということで、調査中も、何かとご不便をかけましたが、幸い、地元の皆さんと工事関係者の御理解と御協力により、初期の目的を果たすことができました。それらの皆さんと、宮田村遺跡調査会会长友野良一先生をはじめとする、現場での作業にあたられた方々に感謝申し上げ、刊行の言葉とする次第であります。

平成6年3月15日

宮田村教育委員会

教育長 小林 守

例　　言

1. 本書は、平成5年度に実施した、西原土地区画整理事業に伴う中越遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、宮田村長の委託をうけ、宮田村遺跡調査会が実施した。
3. 年度内に刊行しなければならない必要もあって、報告書の内容は、資料を示すことに重点をおいてある。
4. 報告書中の遺構実測図や拓影図の縮小率はおおむね次のようにしてある。
遺構全体図——1/500・1/300　　住居址——1/60　　遺構細部実測図——1/20
縄文土器拓影図——1/3
5. 中世の遺物と遺構の性格について、師長野県埋蔵文化財センターの原明芳、市川隆之両氏の御教示をうけた。記して感謝する次第である。
6. 本調査にかかる記録や図面類、出土遺物は、宮田村教育委員会が保管している。

目 次

序

例言

第1章 遺跡の概観と調査の経過	1
第1節 遺跡の立地	1
第2節 調査の経過	3
1 調査にいたるまで	3
2 調査の組織	3
3 調査の経過	3
4 遺物の分類について	4
第2章 遺構と遺物	5
第1節 遺構検出状況	5
第2節 縄文時代前期の遺構と遺物	7
1 住居址	7
(1) 231号住居址 (2) 232号住居址 (3) 235号住居址 (4) 236号住居址	
(5) 237号住居址 (6) 238号住居址 (7) 239号住居址 (8) 240号住居址	
2 土 坑	15
3 遺構以外出土の縄文時代前期の遺物	15
第3節 縄文時代中期の遺構と遺物	15
1 住居址	15
(1) 218号住居址 (2) 219号住居址 (3) 220号住居址 (4) 221号住居址	
(5) 222号住居址 (6) 223号住居址 (7) 224号住居址 (8) 225号住居址	
(9) 226号住居址 (10) 227号住居址 (11) 228号住居址 (12) 229号住居址	
2 土 坑	26
第4節 中世の遺構と遺物	26
1 半地下水式建物址	26
(1) 241号住居址 (2) 242号住居址	
2 堀立柱建物址	28
第3章 ま と め	29

第1章 遺跡の概観と調査の経過

第1節 遺跡の立地

中越遺跡は、天竜川右岸に発達した太田切扇状地の、北側の扇端部に位置し、扇端である天竜川河岸から遺跡の中心部までは、約1kmを測る。この扇状地面は、小河川によって放射状に開析され、いくつかの長峰状の台地の連なりとなっており、遺跡の位置は、大沢川と小田切川の間の台地上の、大沢川がその侵食面を明確にし始める地点でもある（図1）。

大沢川と小田切川の間に形成された台地の上面は、両河川の侵食等によって、様々な変化をみせているのだが、遺跡付近では、台地南縁に部分的に形成された低位面と、北の広い高燥面とで構成されており、後者はさらに、やや低い南側と、高い北側に分けることができる。

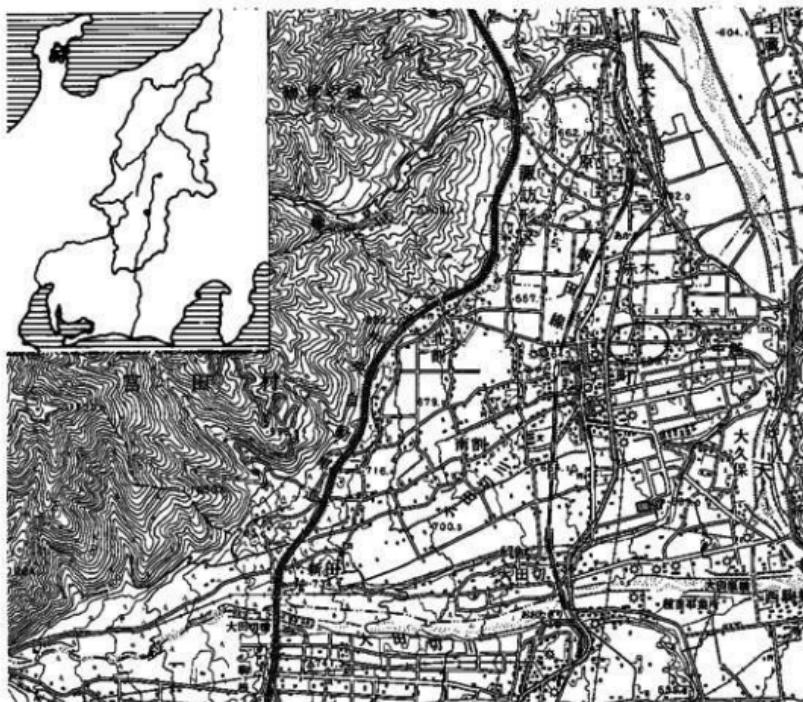


図1 位置図(5万分の1)

遺跡の範囲の台地上は、現在は東へゆるく傾斜する平坦面となっているが、今日までの発掘調査で、東流するいくつかの小さな流れや溝が確認されており、腐塙土層の厚さが極端に薄い地点などもあることから、当初は、もう少し起伏に富んだ地形であったと想定される。今回の調査でも、台地南縁ちかくで、縄文中期の遺物が入りこんでいる、溝状を呈する凹地などがみつかっている。少し前まで、石積みを設けて畑を平坦に整地した痕が所々に見られ、現地形は、かなり整地された後の姿ということができよう。

遺跡付近の表土あるいは耕作土の下は、黒褐色土、褐色土、黄褐色土、を経て黄色土に移行するのが一般的であり、腐塙土の深い地点では、黒褐色土の上に黑色土が存在し、浅い地点では、黒褐色土、次いで褐色土が欠けるかごく薄い。黄色土の下には、太田切扇状地を構成する拳大から人頭大、さらにはひとかかえもある巨大な礫が存在しているのだが、腐塙土の浅い地点では、それらの礫が表土下に顔を出している所もある。

中越遺跡には、高燥な台地北縁に展開する縄文時代前期の集落と台地南縁に連なる縄文時代中期の集落、南の低位面に位置する縄文後期の墓域と考えられる集団造構までが含まれており、結果としてその規模は、約24haと広大なものとなっている。

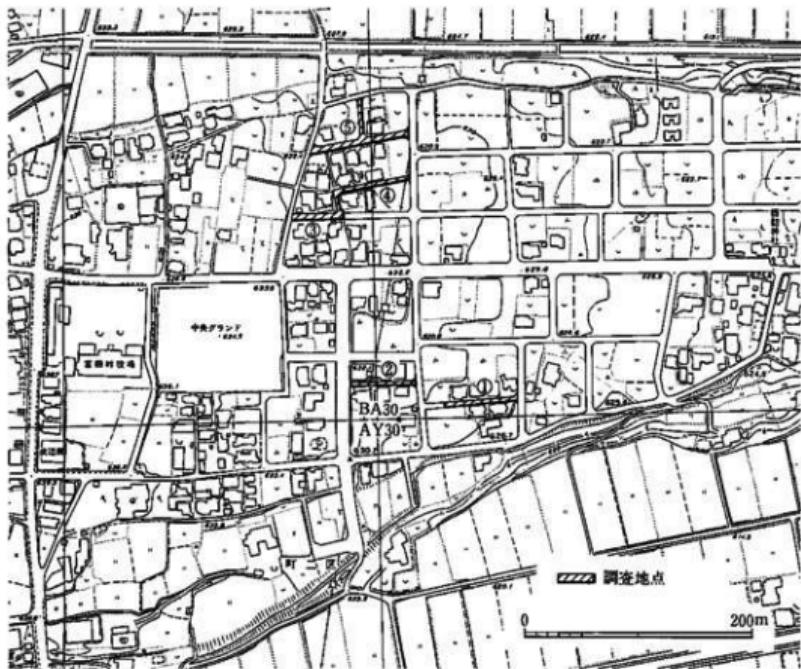


図2 調査地点図(「宮田村平面図」-平成元年2月作成-をもとに作図)

第2節 調査の経過

I 調査にいたるまで

昭和54年に策定された西原土地区画整理事業は、昭和62年に着工にいたり、現在も継続中であるが、それに伴って埋蔵文化財を保存する必要が生じたため、宮田村教育委員会では、宮田村遺跡調査会を組織し、発掘調査を実施して記録保存を図ってきた。

本報告の平成5年度の調査は、第13次西原地区埋蔵文化財発掘調査として実施された。平成5年4月26日、宮田村長伊藤浩を委託者、宮田村遺跡調査会会长友野良一を受託者、宮田村教育委員会教育長林金茂を立会人として委託契約を結び、契約では、埋蔵文化財の発掘調査と報告書の作成を業務内容とし、平成5年4月26日から平成6年3月15日までを委託期間としている。

調査地点は、東西に広い遺跡の中央の、台地南縁に近い、村道775号線の前年度調査した部分を除く全体（図2の①）と、村道736号線の全体（②）。それと、台地北縁に近い村道26号線の西端（③）とその北方の村道627号線とそれから東へのびる道（④）、605号線とそれから北へのびる道（⑤）である。

2 調査の組織

今回の遺跡調査にかかる組織と、現場の発掘調査に参加され、実際の作業をして頂いた作業員の皆さんには次のとおりである。

◇宮田村遺跡調査会	◇宮田村教育委員会	◇調査参加者
会長 友野 良一	教育次長 小林 守	小田切守正
委員 片桐 貞治	(平成5年9月まで)	松下 末春
" 平沢 和雄	小林 修	木下 道子
" 青木 三男	(平成5年10月から)	酒井 麗子
" 伊東 醇一	係長 小林 修	林 美弥子
" 唐木 哲郎	(平成5年9月まで)	西村アグ子
" 加藤 勝美	係長心得 原 寿	伊藤 茂子
教育長 林 金茂	(平成5年10月から)	平沢きくみ
(平成5年9月まで)	係 小池 孝	
小林 守		
(平成5年10月から)		

3 調査の経過

現場における発操作業は、平成5年4月26日から9月28日まで実施した。はじめに村道775号線

を調査したのち、引き続き村道736号線へ入り、この2箇所で、縄文時代中期の住居址12軒と土坑10基を検出した。前年度に同地点で4軒、近くの住宅建設に伴って2軒の住居址が検出されており、さらに今回の調査範囲の中に、遺構の検出されない部分もあることから、縄文中期の集落の一部の様子を、ある程度明らかにできる資料を得たことになる。

7月に個人住宅建設と下水道施設工事に伴う調査によって中断したあと、8月から村道26号線の西端を調査し、中旬に再び個人住宅建設に伴う調査で一時中断しながら、村道627号線と同605号線一帯の道路部分を調査した。この一連の調査では、縄文時代前期の住居址8軒、土坑1基と、中世の半地下式建物址2棟、1棟の掘立柱建物址となるであろう角柱の柱穴群を検出した。縄文時代前期の住居址は、初頭の集落の範囲と考えられていた中での発見であり、過去の推定を跡付けるものといえようが、中世の遺構は、今日まで全く予想されていなかった時期と地点での発見であり、その性格を含めて、今後に課題を提供する発見であった。

平成5年度は本報告以外にも調査すべき遺跡が多く、長期にわたって現場作業を継続せざるを得なかつたため、整理作業は雨天の日と、調査と調査の間の空き日を利用して実施したが、今回の報告書に、遺物の実測図を掲載できるまでの充分な整理をすることができずに終わってしまった。写真図版を見て頂けばおわかりのように、特に土器では、縄文時代中期中葉の終わりから中期後葉の初めにかけての良好な資料を得ているわけで、今後、機会を得て実測図を発表したいと考えている。

本報告書に掲載した調査地点を、遺跡地に設定されているグリッドで表わすと、BA・BB-36~41(図2の①)、BC・BD-28~32(②)、BR・BS-23~27(③)、BT・BU-27~32、BR~BT-26~27(以上④)、BX・BY-24~32、BY~CC-28~29(以上⑤)ということになる。

4 遺物の分類について

本報告書における遺物の分類は、「中越遺跡発掘調査報告書」(宮田村教育委員会1990)での基準と呼称をそのまま使用している。ただ、縄文中期の土器の時期区分については、「長野県史考古資料編(四) 遺構と遺物」に従った。

また、遺跡地には、昭和53年に10m方眼のグリッドが設定されており、今回もそのメッシュを使ったが、地区の呼称は、グリッド設定当時のものなく、「中越遺跡発掘調査報告書」(宮田村教育委員会1990)のものを使用した。

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構検出状況

1 縄文時代前期の遺構の検出状況

住居址は8軒である(図3)。切り合いで2箇所でみられることから、検出された遺構は少なくとも2時期にわたるはずだが、遺物からは時期差を見いだせなかった。いずれも前期初頭のうちでも最も早い時期に属する。調査区そのものが、遺跡全体の中ではトレンチを入れた程度のものであり推測の域を出ないが、検出された住居址は、いずれも広い間隔をおいてみつかっており、集落は家が隣り合うような形ではなかったようである。この時期の住居址は中越遺跡の縄文時代前期の集落域全体から発見されており、中越遺跡は、その発生期から規模の大きな散在集落として出現したことになる。

2 縄文時代中期の遺構の検出状況

住居址は12軒で、台地南縁に帯状に展開する縄文中期の集落にかかる道路部分からの発見である。①と②の調査地点を一本のトレンチとみると、その中央部により濃密に分布しており、東と西の端は、いずれも遺構や遺物包含層がなくなっている(図4)。調査地の南に弧をえがいて存在するであろう浅い溝(第12次調査で台地南縁に検出された礫の入る溝2へ抜けるのではなかろうか)に向かう、南東あるいは南の方向へのゆるやかな斜面の下端といったところに占地しているものとみたい。住居址は中期中葉から後葉にかけてのもので主体は後葉だが、調査域の東端と西端、言い換えると住居址のまとまりの外側の方にあるのは、いずれも中期中葉の住居であり、昭和53年の分布調査の結果から導きだされた。中期中葉から後葉にかけて、集落は南縁へ密集化するとの推測を裏付ける結果となっている。中期後葉の住居址は、いずれも埋土上層に黒褐色土がレンズ状に入りこんでおり、植生の変化を感じられた。

3 中世の遺構の検出状況

台地上の、北縁に近い地点からの検出である。ちょうど、調査対象である道路がT字形に交わる付近でみつかっており、結果として、遺構の周間に放射状のトレンチを入れた形となったのだが、その範囲では、堀や土塁などの構造物の痕跡はみつからなかった。発掘時に住居址と呼んだ2軒は、後に、掘り方の深さから半地下式建物址と判断したが、報告書中では「住居址」の呼称をそのまま用いている。

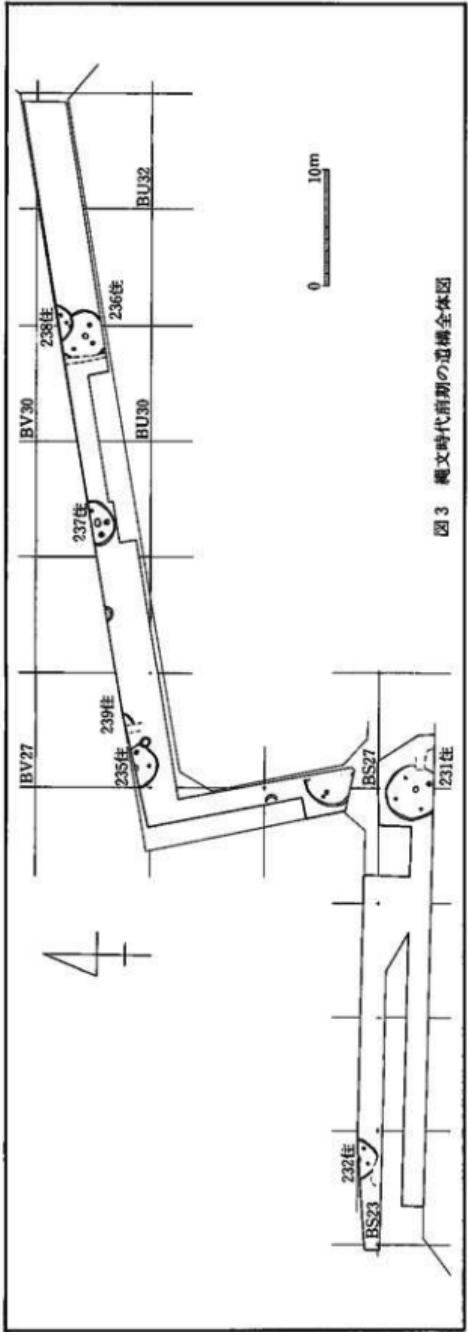


図3 縄文時代前期の遺構全体図

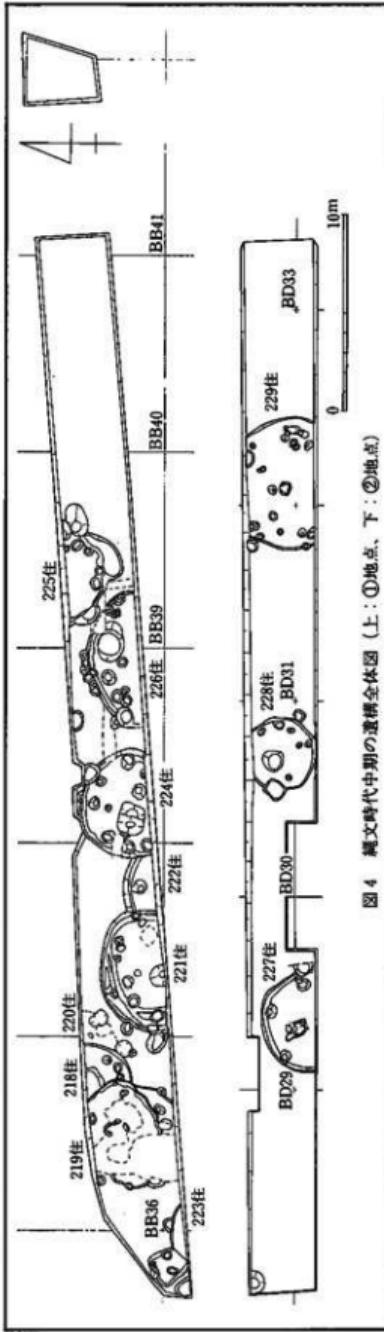


図4 縄文時代中期の遺構全体図（上：①地点、下：②地点）

第2節 繩文時代前期の遺構と遺物

I 住居址

(1) 231号住居址

B R - 26・27グリッドに検出されたやや大型の住居址で、南端がわずかに用地外にかかり、平面形は、直径約4.5mの円形に近い(図5)。東側を中心に水道施設工事等で掘り返されていたため、落ち込みの検出に手間取ったせいもあるが、検出面からの掘り込みはさほど深くなく、20cmから10cm程度であった。主柱穴は4本で、南東の柱間近くの浅いビットの縁がわずかに焼けており、地床炉と判断した。床は柱穴に囲まれた範囲は粘土質の黄色土を入れて堅いが、柱穴の外側は軟らかい。東の壁下の、粘土質黄色土が貼ってあることが確認できた床も、やはり表面が堅くなっていた。

遺物はこの時期の住居址としては多い。土器(図6、7)のうちI群はⅠ期Aに限られるとい

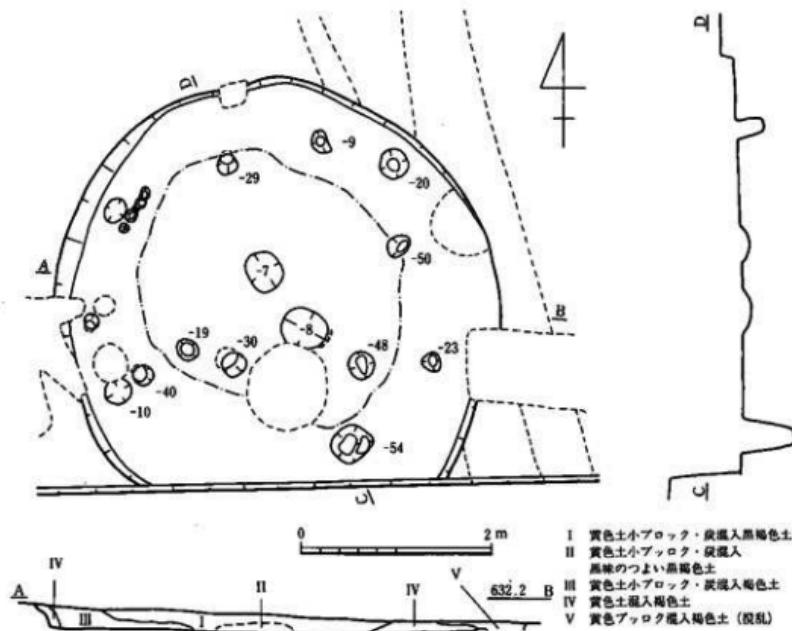


図5 231号住居址実測図



图 6 231号住居址出土土器拓影(1)

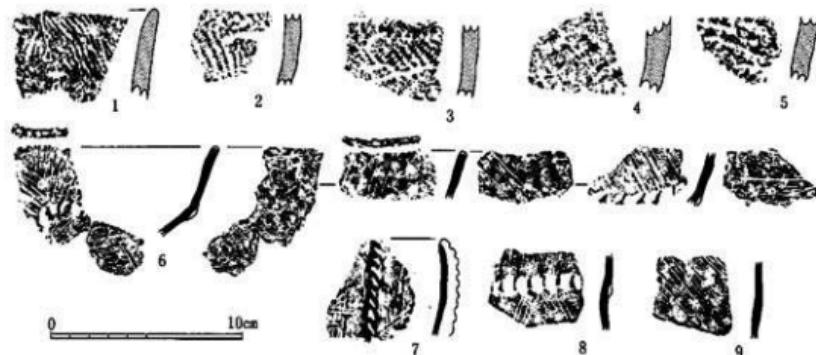


図7 231号住居址出土土器拓影(2)

っていいが、頸部に横位の文様を付かない器形には同Cに入るほぼ完形に近いものが1点出土している。施文具から、時期的には同Aと差がないとしていいだろう。胎土に石英粒を含む纖維の入った土器と、Ⅰ期のⅡ群、Ⅲ群土器が小量伴出している。石器では、石鎌5、石匙1、スクレーパー1、叩石4、礫端叩石1、敲打器1、打製石斧2と、黒曜石の剥片類36、粗大剥片類8、のほか、線状の刻みの入った砾1がある。

(2) 232号住居址

B R・B S-23グリッドに検出された。北半が用地からはずれているため推定だが、北西方向に軸線をおく、一辺3 m、平面形が円みをもった隅丸方形の、小型の住居址となろう(図8)。検

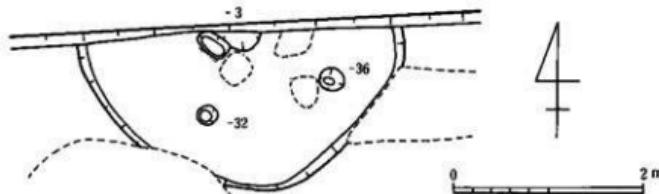


図8 232号住居址実測図

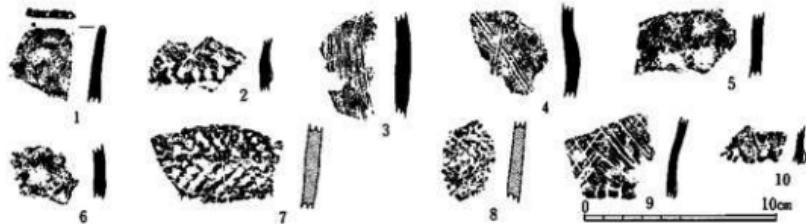


図9 232号住居址出土土器拓影

出面からの掘り込みは10cmほどで、床面は粘土質の黄色土ブロックが多く混じる褐色土で貼ってあり、中央部が堅い。柱穴らしいビットが2本あるが断定はできない。中央南西寄りの、縁の一郎が焼けたビットが地床炉であろう。全体に新しい擾乱が入っており、保存状態は良くない。

遺物は少なく、土器はⅠ期Ⅰ群Aの破片が少しで(図9)、石器も黒曜石の剥片類が15ほど出土しているにすぎない。

(3) 235号住居址

B U27グリッドに検出された、北西に軸線をおく、平面形が円みをもった隅丸方形となる住居址で、一辺約3mと小型である(図10)。北側の三分の一ほどが用地外となる。柱穴が2本みつかっている。用地際の住居址中央北西寄りに、底の一部が焼け、木炭が入る地床炉があるが、その下には袋状のビットがあり、炉はそのビットの埋土に粘土質黄色土混じりの土を貼って構築していた。床は粘土質黄色土で貼ってあり、南西の壁下には貼り床が見えない。

遺物は少なく、土器はⅠ期Ⅰ群Aの小破片(図11)、石器は石鏃、スクレバー各1があるだけである。埋土上層に中期の土器片が混入している。

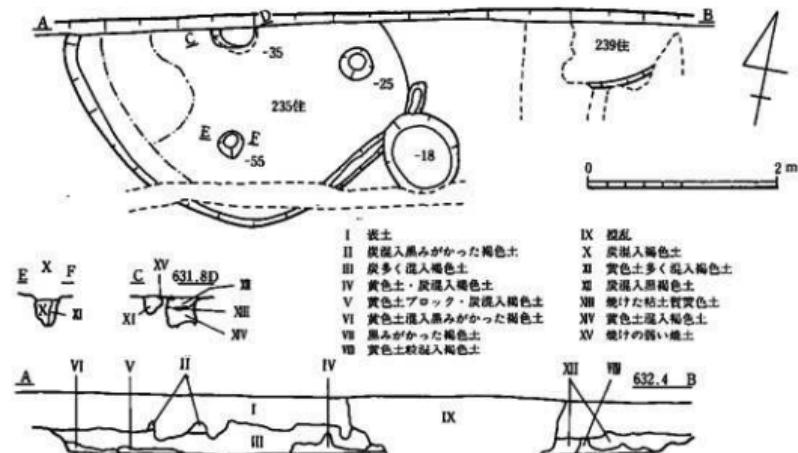


図10 235・239号住居址実測図



図11 235号住居址出土土器拓影

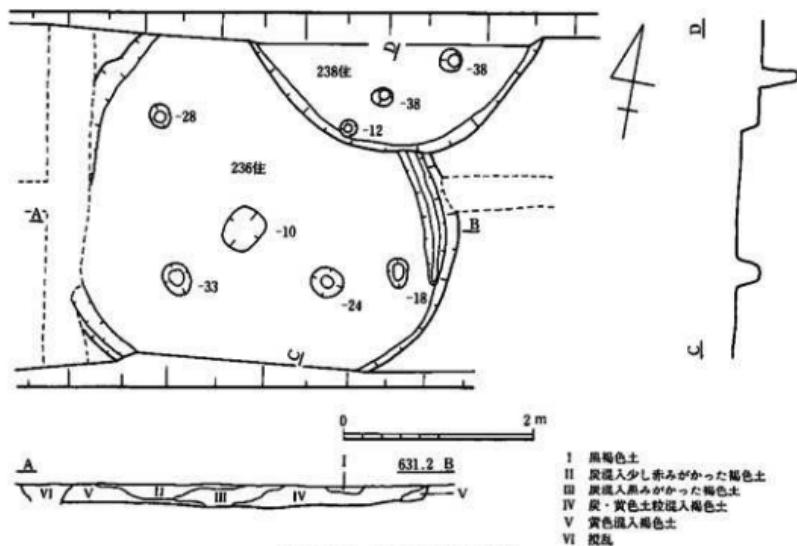


図12 236・238号住居址実測図

(4) 236号住居址

B U - 30・31グリッドに検出され、238号住居址と切り合う（図12）。遺物からは時期差を特定することができないが、床面が相対的に低い238号住居址の、236号住居址と重なる部分の埋土に貼り床が見えなかったことから、238号住居址の方が新しいとしておきたい。平面形は、ほぼ南方に向転線をおく凹みをおびた隅丸方形で、一辺約4m。柱穴は4本で、南東の壁下以外を全周する周溝縁までの床全面に、粘土質黄色土ブロックによる貼り床がみられた。炉は中央南寄りの地床炉だが、焼土等は観察されなかった。

遺物は比較的多いが、土器のうちI群は、Ⅰ期Aがほぼ全てという単純さで、Ⅰ期のII群とIII群が少量併出している（図13）。石器は、石鉄5、スクレバー4、石錐2、叩石1、打製石斧2のほかに黒曜石の剥片類が、剥片30、層片50、石核23など多い。しかし、それらの中に整った形のものは少ない。埋土中に縄文中期の礫石錐程度の大きさの硬砂岩の小円礫が8ほどあり注意された。

(5) 237号住居址

B U29グリッドに検出されたが、北側四分の一ほどが用地外となるため調査しない。平面形は南北方向に転線をおく凹みの強い隅丸方形で、3.5×3.0mほどの小型の住居址である（図14）。検出面から床面までは30cmほどある。柱穴は用地外の1本とあわせて4本と考えられ、壁下を周溝が全周し、床は粘土質黄色土によって全面が貼られていた。炉は中央南西寄りの地床炉である。水道施設工事の跡が2本みられたが、いずれも床面までは達していなかった。

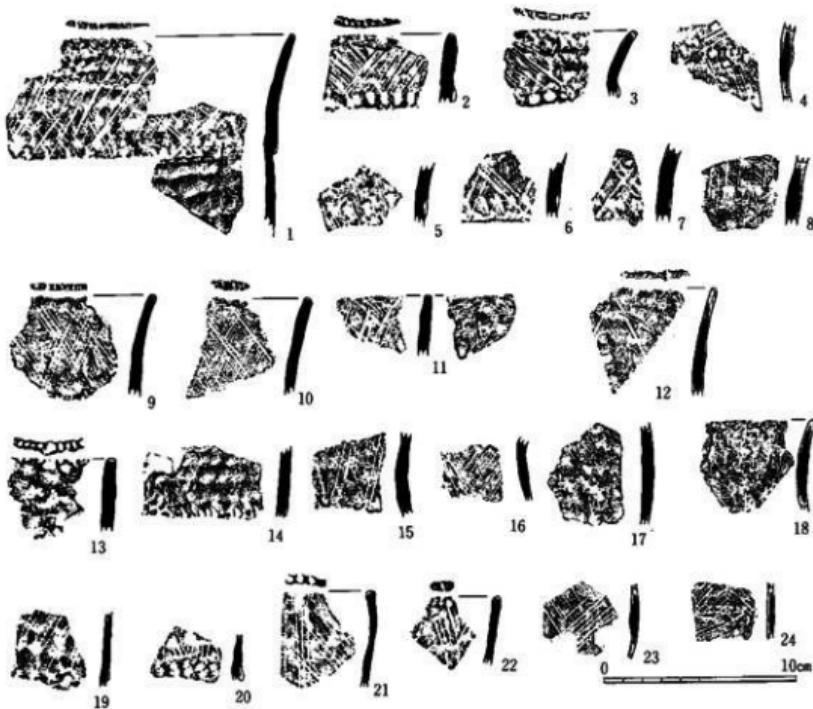


図13 236号住居址出土土器拓影

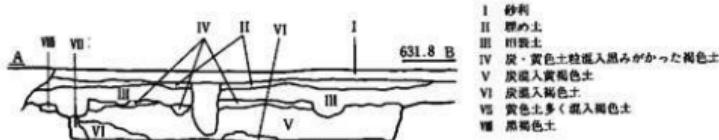
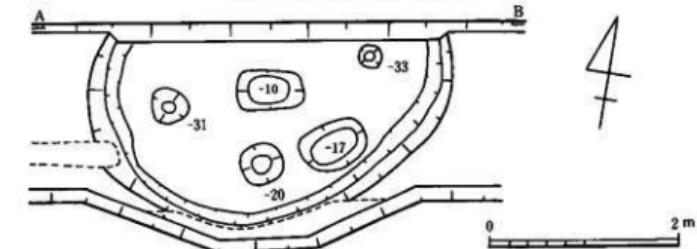


図14 237号住居址実測図

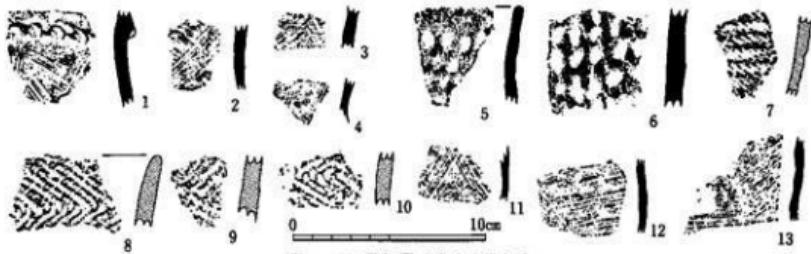


図15 237号住居址出土土器拓影

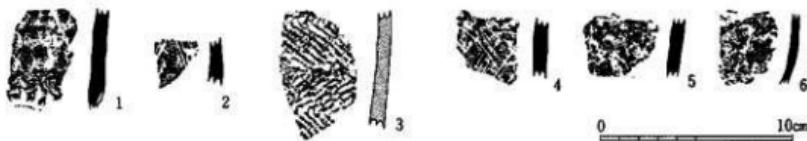


図16 238(1~3)・239(4~6)号住居址出土土器拓影

調査した面積からすると遺物はごく少なく、少量のⅠ期Ⅰ群Aの土器片（図15）と、石匙1が出土しただけである。

(6) 238号住居址

BU-30・31グリッドに検出され、236号住居址を切っている（図12）。大部分が北側の用地外となるため推定だが、平面形は北西方向に軸線をおく円みを帯びた隅丸方形を考えられる。検出面からの深さは約40cmほどある。柱穴が2本検出されたが全体の配置を知ることはできず、調査した範囲では周溝もみつかっていない。床には粘土質黄色土ブロック混じりの土が貼られていたかさほど整ったものではない。

遺物も少なく、少量の土器に236号住居址との時期差を見いだし得ず（図16）、石器も、叩石1のほかは、黒曜石の剥片類が数点発見されただけである。

(7) 239号住居址

235号住居址の東、用地北壁下の1.2×0.6mの範囲に、粘土質黄色土を貼った面がみつかりその南に、10cm弱高い黄褐色土の面が観察されたことから住居址とした（図10）。付近は部分的に床面の深さまで擾乱されており、隣接する235号住居址と重なるかどうか明確でなく、床面施設も調査した範囲からは発見されていない。

埋土出土の遺物はごく少なく、土器はⅠ期Ⅰ群Aの小破片がわずかだが（図16）、叩石と礫端叩石が各1出土している。

(8) 240号住居址

BS26・27グリッドに検出されたが、東側が用地からはずれ、南もすでに道路の工事が入っていたため全体を検出することはできなかった（図17）。また、ほぼ中央が水道工事によって筋状に床まで破壊され、東の用地界にも、床面下まで達する新しい穴がある。平面形は、円みをもった

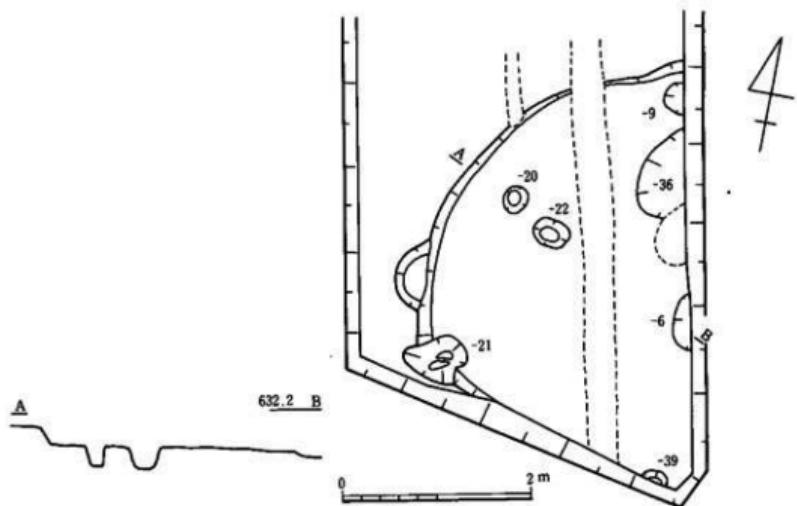


図17 240号住居址実測図

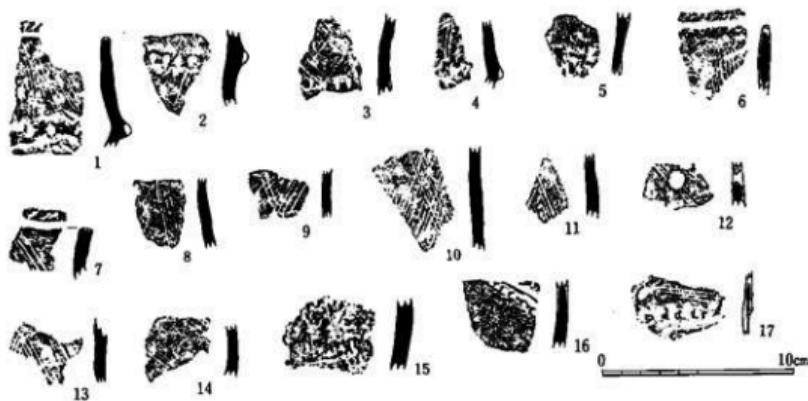


図18 240号住居址出土土器拓影

形という以外は特定できず、柱穴も配置まではわからない。周溝はなく、床面も特に堅いという所はなかった。

遺物は少なく、I期Ⅰ群Aの小破片（図18）と、黒曜石のスクレバー2、叩石と礫端叩石が各1出土しているにすぎない。ただ、中期初頭の胴下半から底部の大破片が北西寄りの埋土からかたまって出土しており、調査中は確認できなかつたが、その時期の遺構が埋土中に存在していた

ことも考えられる。

2 土 坑

237号住居址の西約4m地点に用地北壁に半分かかって1基、240号住居址の北外に1基検出された。前者は深さが60cmと深く出土土器からⅠ期の初めのものである。後者は検出面からの深さは20cmと浅いが、埋土から中期初頭の土器が一定量出土しており、240号住居址の中に推定したものとあわせて、中期初頭の遺構であると判断される。

3 遺構以外出土の縄文時代前期の遺物

縄文時代前期の遺構から出土した遺物は、全体的には少量にとどまっている。今回の調査地点に遺構を構築した縄文時代前期初頭でも最も古い段階では、住居廃絶後の窓みが、破損した土器を処理する場所にはまだなっていなかったことにもようが、住居址埋土以外にこの時期の遺物包含層はなく、道具として持っていた土器の絶対量自体も少なかったのであろう。

第3節 縄文時代中期の遺構と遺物

I 住居址

(1) 218号住居址

B B36グリッド地点に、北半が用地外となる状態で検出された住居址で、10cmほど高い位置にある220号住居址の西半分を切り、南西を10cm低い219号住居址によって切られている(図19)。平面形は直径5m程度の円形が推定され、埋土最下層に炭の多く混入する黒色土が観察された。周溝はない。柱穴と考えられるピットが用地内に2本検出されたが、全体の配置を知るまでにはいたっていない。床面は中央の深い大きなピットは、埋土の状態から、廃絶時にはすでに掘られていたものと考えられる。炉はみつかっていない。

遺物は少ない。埋土から出土している土器は中期後葉Ⅱ期が主体で、用地北壁にもぐりこんでハの字状沈線を地文とする唐草文系土器の大破片がある。石器は打製石斧、粗大石匙、叩石、礫石錘、黒曜石製スクレバー各1が出土している。主体となる土器から、中期後葉Ⅱ期の新しい時期の住居址としたい。

(2) 219号住居址

B A・B B36グリッドに発見され、218号住居址を切っている(図19)。検出時には1軒の大型の住居址と判断したもの、結果は2軒となった。両者の関係は建て替えというよりも切り合いで、ここでは整理の都合上、前後関係から新址・旧址に分けて記述するにとどめたい。旧址の南側、新址の北側がそれぞれ用地から外れると共に、西側から新址の炉付近にかけての広い範囲

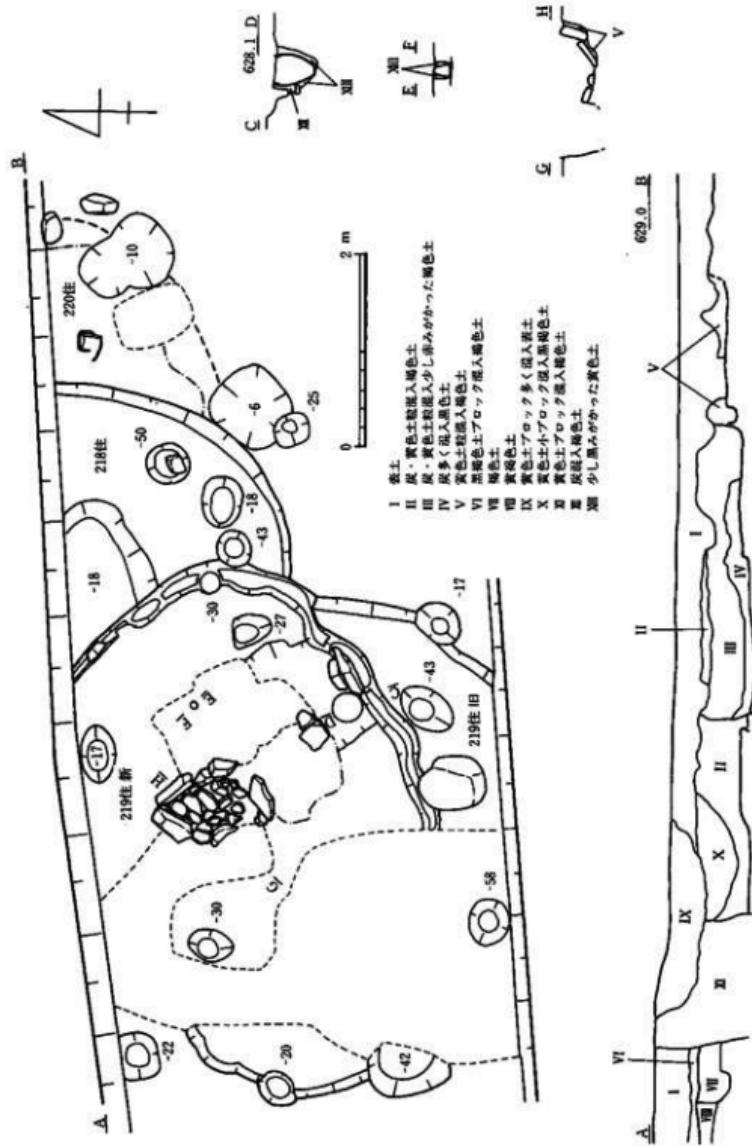


図19 218-220号住居地剖面図

が破壊されてしまっているため、詳細については不明な点が多い。

西と南東のごく一部が残っているだけの旧址は推定径5m。周溝はなく、柱穴としていいピットが2本みつかっている。一方新址の平面形は、北西方向に軸線をおく一辺4mほどの円みをもった隅丸方形である。壁下を周溝すると考えられる周溝は東側が特に深く、床面は粘土質黄色土が厚く貼ってあって堅いのだが、北東壁下で、この貼り床が周溝の上まで延びている状態が観察されている。床面を貼る時、すでに一度掘られた周溝は埋め立てられていた可能性が強い。柱穴は3本発見され、4本柱が推定できる。床面中央の炉は、炉縁石がほとんど抜かれてしまっているが、掘り炬燵状の大型の石囲炉であり、炉底には板状の礫を敷き詰めてある。この炉の東には小型の深鉢が逆位に埋設されていた。底部を欠いているが、土器の付近の床面に一度掘られた痕跡があり、それが伏甕としての本来の姿であったかは断定できない。南東壁中央部には、周溝内にある梢円形のピットのすぐ内側に柱状の石を2個置き、その西に接して埋甕を埋め、床面を掘り鉢状に7~8cm程凹めてあり、入口部と判断される。

遺物は多い。埋土から出土している土器は、中期中葉も少量あるものの主体は中期後葉II期で、口縁部を隆帯で区画して間を深めの沈線で埋める、いわゆる下伊那タイプが比較的顕著にみられる。石器は、打製石斧11、横刃型石器8、粗大石匙1、磨製石斧2、叩石2、敲打器2、敲打製石器1、石鎌1、石錐2がある。2点の埋設された土器から、中期後葉II期の新しい時期の住居址としていいだろう。

(3) 220号住居址

遺構検出時に貼り床面を発見して存在に気付いており、破線部分が範囲となろう(図19)。218号住居址によって西側を切られ、北半は用地外となっている。周溝はなく、柱穴もみつかっていない。床面中央の南東に寄った地点に、土器片を使って方形に組んだ遺構があり、土層観察では、焼土等は見えなかったものの内部が開口していたと判断され(図20)、炉と考えた。

遺物はごく少なく、埋土出土土器に見るべきものはない。石器は打製石斧、横刃型石器各1がある。炉に使用されている土器片は、中期中葉末から後葉I期の大型で厚手の深鉢口縁部であり、遺構の所属時期もそのあたりに求められよう。

(4) 221号住居址

B A・B B37グリッドに検出されたが、南半は用地外となる(図21)。222号住居址を切っている。周溝などからみて少なくとも2回は建て替えられており、最新址の床面までは検出面から40cmを測る。

「旧址」は北西壁下に三日月形にわずか床面が残っている。床面は壁際がなだらかに高くなっている。

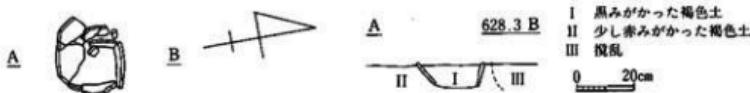


図20 220号住居址炉実測図

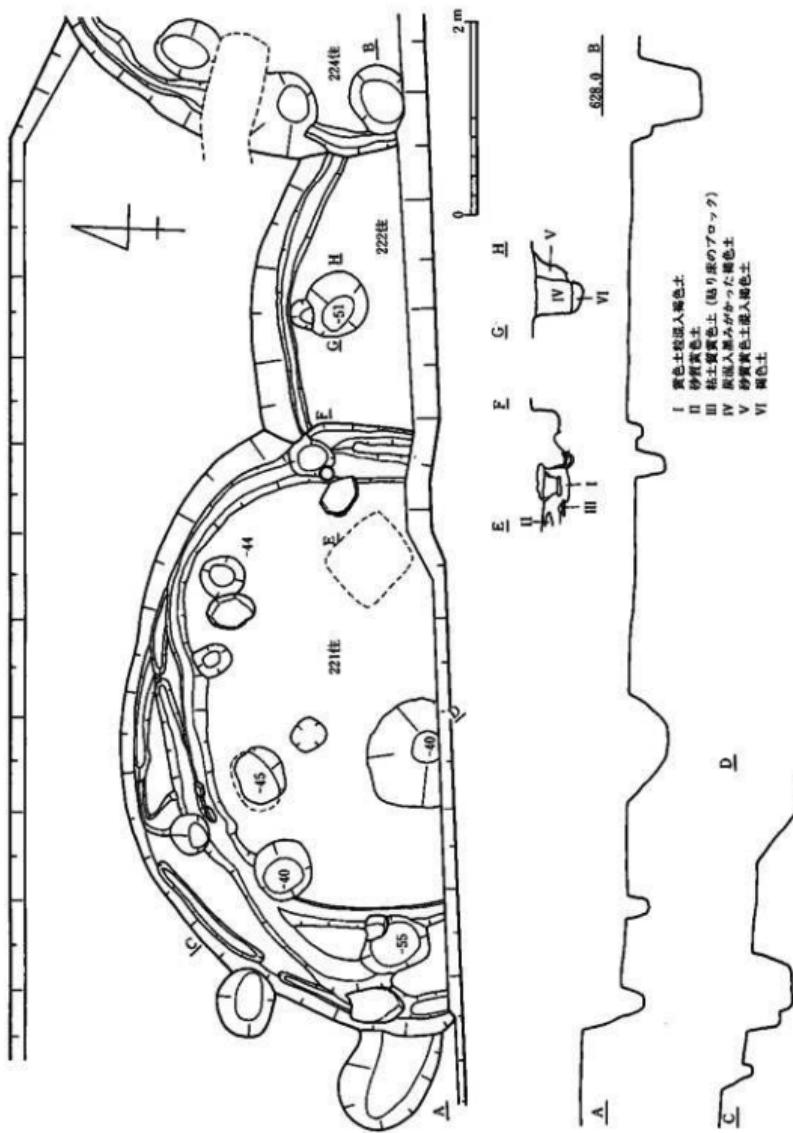


図21 221・222号住居地実測図

おり、壁直下を切れ切れに周溝が巡り、柱穴1本がみつかっている。「新址」は、西と東の壁際部分と、最新址の下に周溝と柱穴が残されていただけだが、西南内方向に軸線をおく一辺6m程の、大型で円みをもった隅丸方形が想定される。旧址よりも7~8cmほど深く掘り込んでおり壁下を広くて深い周溝が全周している。床面はやはり壁際がゆるやかに上がっており、西壁下に1本と最新址の貼り床下に1本の柱穴を発見したが、前者は柱穴部分の住居内側まで、粘土質黄色土による貼り床が観察された。「最新址」は、位置を新址よりもわずかに北にずらし、軸線もわずか西寄りに振って構築してあり、平面形は円みをもった隅丸方形と変わらない。ただ規模は一辺5m弱とやや小型になる。床面の高さは新址とほぼ変わらず、粘土質黄色土で丁寧に貼り、さらに、構築時に新たに北側へ掘り込んだ際に現れた壁下の疊層の部分にも、必要に応じて粘土質黄色土を貼ってある。柱穴は北壁際の両端に2本検出され、4本柱が想定される。炉は中央西寄りにあり、炉石はすべて抜かれて摺り鉢状のピットでしかないが、底にわずか焼けた部分が残っていた。東壁下の周溝内側に接する位置に蓋石をした埋甕がある。胴下半部を欠く土器は、蓋石よりも二回りほど小さい平石の上に据えた状態で埋められており、土層観察の結果では、この土器を埋めるために掘られた部分を特定するのは難しい。この埋甕の外側の周溝内から、中に深鉢底部のみを正位に入れた、深鉢の胴部から下が発見された。外側の深鉢は最新址の深鉢と時期差がないが、位置的にみても、「新址」の埋甕である可能性が高い。

遺物は非常に多い。全体の埋土から出土した土器は、縄の結節部を好んで用いた縄文を地文とし、口縁部は渦巻き文を伴う隆帯によって横位に、胴部は低い隆帯によって縦位に区画するキャリバー型土器が主体となる。石器は、打製石斧24、横刃型石器1、粗大石匙2、磨製石斧2、礫石錐1、敲打器4、礫端叩石3、石錐1がある。埋甕と、埋土の主体となる土器から、「新址」は中期後葉III期の新しい時期の住居址であろう。「新址」と「最新址」との間に時期的な差はない判断されるが、「旧址」の所属時期は特定できなかった。

(5) 222号住居址

BA・BB37グリッドに検出されたが(図21)、西側を221号住居址、東側を224号住居址にいづ

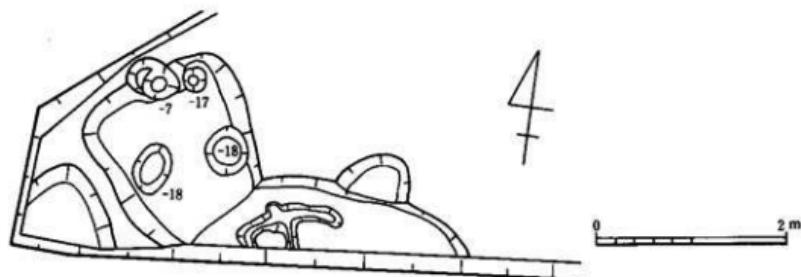


図22 223号住居址実測図

れも切られる上に、大半は南の用地外となるため、今回は北のごく一部を調査しただけである。検出面から床面までは40cm。壁下を周溝が巡り、床が粘土質黄色土で貼られて堅いほかは、用地内に柱穴を1本発見しただけである。規模や平面形、炉の形態などはわからない。

遺物も少なく、土器は唐草文系土器を主体とし、石器は打製石斧2、敲打器1のみである。中期後葉II期新からIII期古のあたりに所属時期は求められようか。

(6) 223号住居址

B A35グリッドの用地南縁からわずかに顔を出すような形で落ち込みがあり、底面に粘土質黄色土が見られたことから住居址としたものだが(図22)、柱穴などの床面施設は発見されず、埋土に相当する部分からも遺物は出土していない。

(7) 224号住居址

B B38グリッドの南西隅に検出された住居址で、222号住居址の北東隅を切り、南側は一部用地外となる(図23)。検出面からの掘り方は45cm。平面形は西北西方向に軸線をおく東側が張りだした五角形に近い円みをおびた隅丸方形が想定できる。埋土下層には人頭大の環がレンズ状に入り

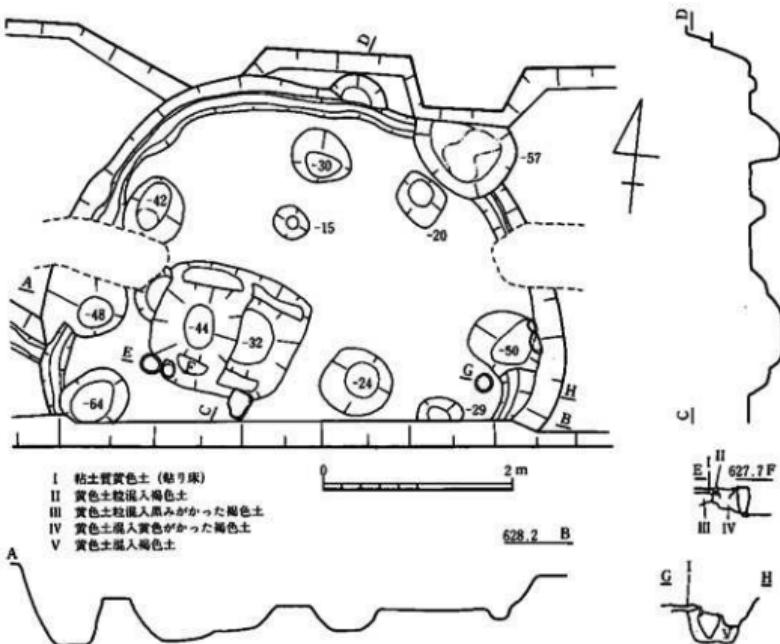


図23 224号住居址実測図

込んでおり、その下面是炉の中まで達していた。壁下を周溝が全周し、粘土質黄色土によって貼られた床面は、南東方向に向かってゆるく傾斜している。柱穴は用地内に4本検出され、南の用地外に存在するであろうものと合わせて6本柱と考えられるが、特に、北西の柱穴内の南端に検出された粘土質黄色土混入褐色土の堅い面は、あるいは柱の下面を支えるためのものかもしれない。炉は線石が全て抜き取られているが、痕跡から、細長い石を組んだ大型の方形石囲炉であり、底面をみると西側が一段低くなっていることから、作り替えられている可能性がある。ほかに痕跡がないが、建て替えがあったのかもしれない。この炉の南西隅に立てて埋めてある、下が不整に尖った丸棒状の石は、石棒の断片の可能性がある。さらに炉の西には、胴下半部を欠く深鉢が、正位に埋められていた。東壁下の周溝内側に蓋石のない埋甕があり、その南西の小型の柱穴と合わせて、入口施設ということができよう。北東の壁を切るようにして土坑があり、その内部にも粘土質黄色土の混入する褐色土の堅い面が観察されている。

遺物は多い。埋土出土土器の主体は、口縁部は隆帯によって区画した中を沈線で埋め、胴部は繩文を地文とし、沈線によって頸部に渦巻き文を配し、そこから沈線を縱位に垂下して区画するキャリバー型の深鉢で、2点の埋設土器も形態はかわらない。厚手の器台の破片がある。石器は打製石斧18、横刃型石器2、磨製石斧3、敲打器3、礫端叩石1、礫石錐3、石匙1が出土している。中期後葉II期の住居址である。

(8) 225号住居址

B B39グリッドに検出され、北半は用地外となる(図24)。南に埋土と同じ土が存在したため掘り広げであるが、住居は周溝まで、一辺4m弱の北西方向に軸線をおく円みをもった隅丸方形となろう。埋土は赤みがかった褐色土を呈し、掘り方が深く、検出面からの深さは70cm近い。壁下に部分的に周溝があり、床は粘土質黄色土による貼り床となっている。柱穴としていいピット

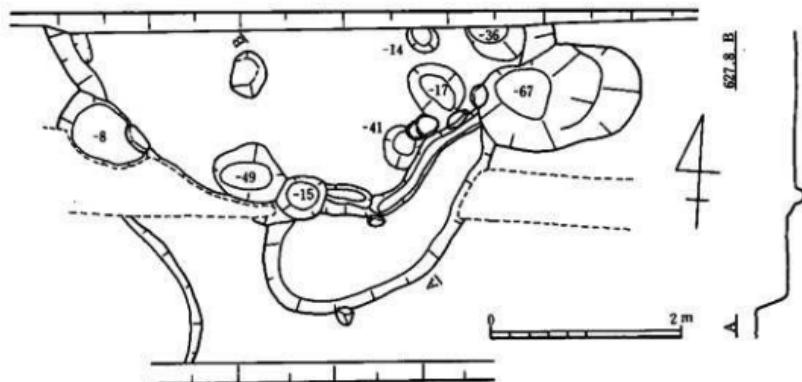


図24 225号住居址実測図

は用地内に3本あるが、その採否も含めて、全体の配置まではわからない。東壁を切る深い土坑は遺物からみて住居址より新しい。

埋土から出土した遺物は多く、土器は中期中葉VI期が主体で、石器には、打製石斧16、粗大石匙2、横刃型石器4、磨製石斧3、叩石3、石皿1、礫石錐6、石錐2がある。①地点の中では礫石錐が際立って多い点、本址がこの地点では唯一の中期中葉の住居址であることと合わせて興味深い。また磨製石斧の中に玉斧といつてもいいものがあり注意される。

付近では唯一、中期中葉に属し、その終わりの時期の住居址である。

(9) 226号住居址

B A・B B - 38・39グリッドにかけて位置する住居址で、南の半分以上が用地外となる。また、南の用地境は水道が施設されたため、調査していない(図25)。検出面からは30cm程度と浅く、平面形は特定できないが、規模は直径6m近い大型となろう。壁下を周溝が全周する。床には粘

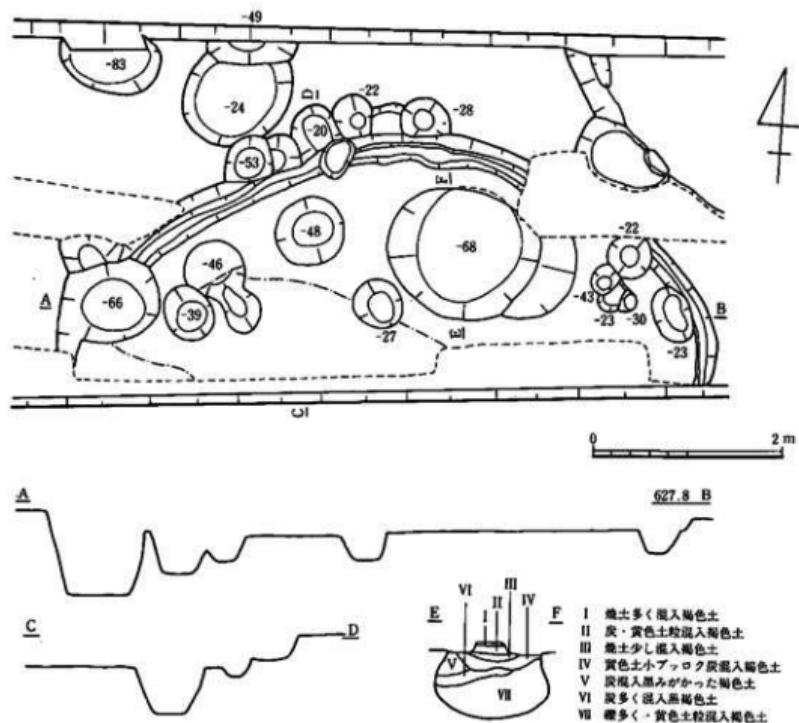


図25 226号住居址実測図

土質黄色土による貼り床が観察されたが、ほぼ中央、北西から南東方向の帶状に、貼っていない部分があり、貼り床自体もさほど厚いものではない。明らかに柱穴となるであろうピットは2本で、うち西側の1本は上面に貼り床されており、他に痕跡がないものの建て替えを経た旧址の柱穴の可能性が高い。床面北東を大型で袋状の土坑が、北西壁を中型の土坑が切っている。また北壁に接した外に浅いピットが連なっているが、住居址との関連も含め、性格は不明である。

遺物は中量で、土器は中期後葉Ⅰ期が主体であり、石器には打製石斧4、粗大石匙1、横刀型石器5、磨製石斧2、礫石鏟1がある。掘り方が浅く大型であるという造構の形態と出土遺物から、中期後葉Ⅰ期の住居址としたい。

図26 227号住居址

BC・BD-29グリッドに発見されたが、南半が用地外となると共に、水道管の施設工事によって床と炉の一部が破壊されていた(図26)。平面形は、北北西方向に軸線をおく円形をもった隅丸方形で、一辺5mほどの規模が想定できる。本址から西の一帯が、道路工事以前に黄色土層まで削平されているため、検出面からは20cm程しかなく、埋土も、下層に位置していただろう黄色土粒混入褐色土だけの単純な部分しか残っていない。柱穴よりも黄色みの強い褐色土が埋まる幅が広くて浅い周溝が全周し、床は粘土質黄色土によって貼られ、西から北にかけてが特に堅い。壁直下に位置する柱穴は用地内に3本検出されており、全体では6本柱が想定できる。炉は長方形の石圓炉で北側は住居を掘った際に顔を出した地山の石をそのまま使い、南辺は平石を平らに、

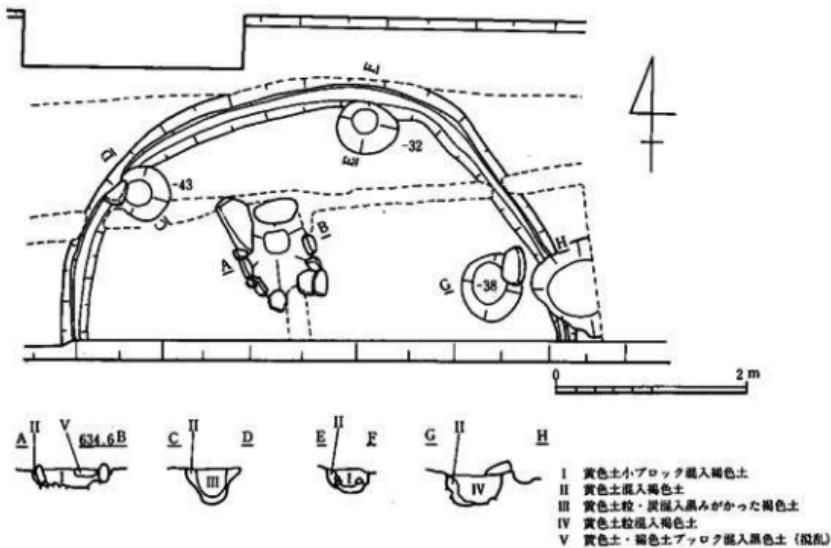


図26 227号住居址実測図

他の2辺は立てて組んである。東の柱穴の外側の平石は、据えられていた可能性が高い。

遺物は少なく、土器は中期中葉も一定量あるが、主体は中期後葉Ⅰ期で、石器には、打製石斧4、横刃型石器2、叩石2、敲打器2がある。中期後葉Ⅰ期の住居址であろう。

(1) 228号住居址

B C・BD-30グリッドに発見され、北隅がわずか用地からはずれ、西壁上と中央北西寄りの炉の位置には、性格の似た土坑によって破壊された部分がある。検出面から床面までは20cm程度と浅く、埋土は褐色を呈していた。周溝はなく、南から東にかけての壁下を除き、床は粘土質黄色土で貼っている。柱穴は用地内に4本発見されており、5本柱を想定したい。断定はできないが、土坑によって破壊されている床中央の石組が炉の一部となろう。

遺物はさほど多くない。土器は中期中葉VI期が量的には最も多いため、中期後葉Ⅰ期が一定量あり、同III期の大破片も数点あり気になる。石器は、打製石斧7、粗大石匙1、磨製石斧2、叩石1、敲打器1、敲打製石器1、礫石錘4が出土している。新しい時期の土器は上層からの出土であり、中期中葉末の住居址としておきたい。

(2) 229号住居址

B C・BD-31・32グリッドに発見され、南と北が用地から外れている(図28)。深い中期の遺

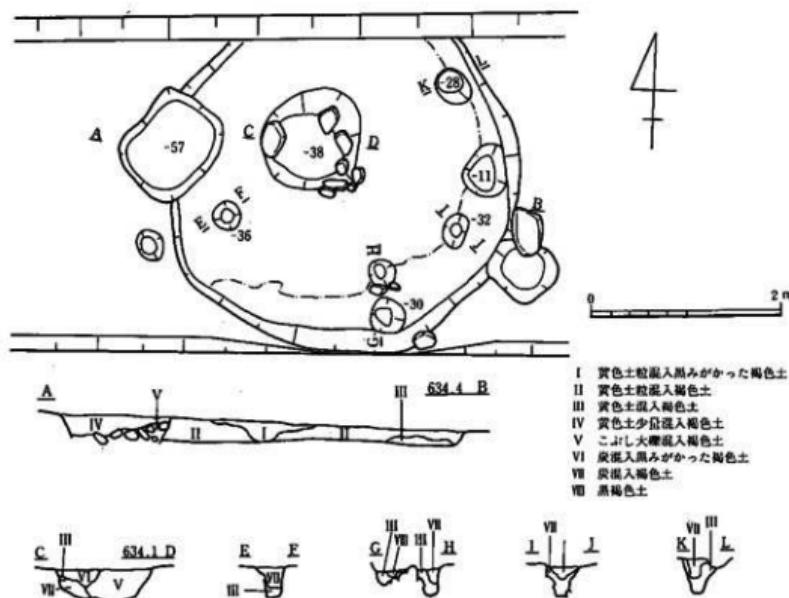


図27 228号住居址実測図

物包含層中に構築されていた住居址であり、下層の埋土と遺物包含層の土との区別が困難であったことから検出に手間取り、平面形を確定したのは床上数cmから十数cmの所であった。埋土最下層には炭を多量に混入する黒色土がほぼ全面にみられた。平面形は特定できないが、規模は直径6mを超える大型の住居址である。床面は赤みの強い粘土質黄色土によって薄く貼られ、柱穴が用地内に4本あるほか、それより内側に小型で深いピットが3本検出されている。いずれも全体の構成まではわからない。東壁近くの柱穴の南に、中層に黄色土の混入する褐色土の入る袋状に近い橢円形のピットがあり、周囲に浅いピットが幾つか集中している。炉は小振りの石囲炉で、東側だけが細長い石を使っており、その部分を焚き口と考え、先のピットの集中する部分を入口とすると、軸線は西北西方向に設定できよう。

遺物はやや多い。土器は中期後葉Ⅰ期が主体で中期中葉も少なからずある。石器は、打製石斧13、横刃型石器3、磨製石斧1、敲打器3、礫石錐4が出土している。過去の調査においても、本址の構築されている遺物包含層は、縄文中期中葉を主体とするものであり、該期の遺物が廃絶後の住居址内に入り込む可能性は大きく、遺構の全体形と炉の形態から、中期後葉Ⅰ期の住居址としたい。

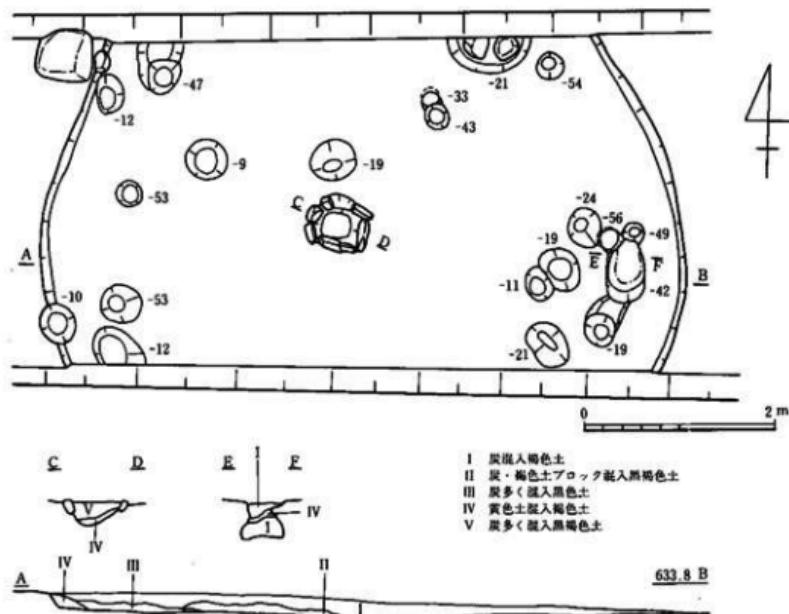


図28 229号住居址実測図

2 土 坑

調査した範囲では、224号住居址から225号住居址にかけての北側と、228号住居址付近、227号住居址西方などで検出されている。

224号住居址から225号住居址にかけての土坑は、土坑群の一部といつていいだろう。ただし形態に斎一性はなく、大型で袋状のもの、中型で深いもの、中型で浅いものなどがある。225号住居址の東壁を切るものが出土土器から中期中葉Ⅰ期と断定できるほかは決め手となる資料に乏しいが、埋土等から中期後葉のものということはできそうである。

228号住居址を切る2基の土坑の埋土下層には、いずれも、斜面下方である南東側に片寄って人頭大の礫が多数入っていた。性格は不明だが、人為的色彩が強い。

第4節 中世の遺構と遺物

I 半地下式建物址

(1) 241号住居址

B Y28-29グリッドに検出され、東と西がいずれも用地の外まで広がる(図29)。平面形は、軸線が東からやや北に振る幅4m弱の長方形となろう。検出面からの深さは70cm近い。埋土には最下に炭化材や茅の炭化物が層になって堆積しており、明らかに消失家屋である。それが偶発的なものかあるいは計画的な行為であったかの判断は難しいが、調査範囲には少なくも日常の什器等が残されていた痕跡はない。さらに埋土から、壁際から30cmほどの間は、構築時に内面が垂直になるような状態で埋めてあったこと、図示できなかったが上層にはブロック状の大量の黄色土があり、明らかに人為的に埋め立てられたことなどがわかる。床面は壁際の部分を除き粘土質黃色土で貼ってある。柱穴は床面に底面形が円形の方形のピットが2本あるほか、壁の部分や壁上に方形のピット、さらに、北壁上に不規則ながら小さなピットが連続してみつかっている。しかし、上屋を想定できるまでには至っていない。炉は、軸線上の方形のピットで、縁の状態を知る資料は検出されなかったが、内部には少なくも2層に分けられる多量の灰か摺り鉢状に残っていた。この炉の西には、床面からさらに57cmも掘り込んだ、南北1.8m、東西1.8m以上の矩形の穴がある。穴の最下層にも炭化材が多量に混入していることから、建物址と一体のものと考えられるが、角に柱穴とも見えるピットがあるものの、建物内での機能まではわからない。

遺物は少なく、内耳土器を主体とする土器はいずれも小破片で埋土の上層からで、ほかに元祐通寶2点や、南の掘立柱建物址から出土したものと同一個体の綠釉小皿の破片などが出土している。

(2) 242号住居址

241号住居址の北東のCA29グリッドに検出されたが、用地にかかったのは西端のわずかである(図29)。規模や形態は241号住居址と同じと判断される。埋土には、掘り上げることがためらわ

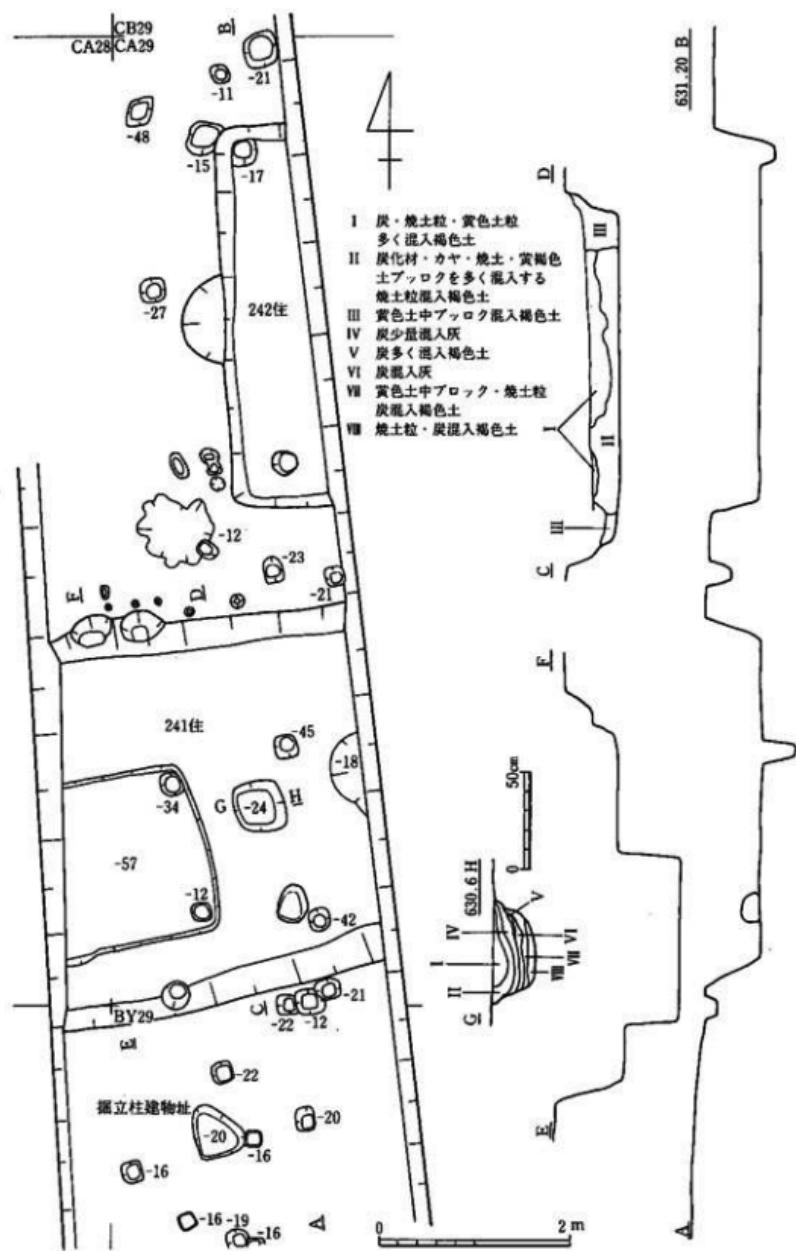


図29 241・242号住居址・据立柱建物址実測図

れるほどの、多量のブロック状の黄色土が投げ込まれており、やはり廃絶後の窪みは人為的に埋められたものと断定していい。住居内の北西隅と周囲に幾つか方形のピットがあり、柱穴群の一部なのであろうが、上屋の構造までは推定できない。西壁中央の摺り鉢状に窪んだ部分は入口であるかもしれない。

遺物は、ごく狭い部分の発掘にしては多く、埋土中層の黄色土ブロック層の下付近を中心として、内耳土器の完形に近いであろう大破片、14点の蓋手石（中に、両端に軽い打痕が観察されるものがある）などが出土している。

2 挖立柱建物址

241号住居址の南に方形のピットがいくつもあり、用地中央の平面三角形のピット内に、炭と焼土混じりの土、その下に灰が観察されたことから、掘立柱建物が存在していたものと考えた（図29）。しかし、調査範囲が狭い上に、北側が241号住居址によって切られているようで、柱の配置までは特定できなかった。検出面は当時の地表面を削り込んでいる。

遺物は少ないが、瓦製の火鉢の破片、大庶期前半の鉄釉の天目茶碗、古瀬戸の縁釉小皿、古瀬戸の平碗の破片などがあり、半地下式建物址とは、明らかな性格の相違が見て取れる。遺物からは両者の間に有意な時期差はなく、いずれも、15世紀後半から16世紀初頭の遺構であるが、切り合いから、掘立柱建物址の方が先行するということができよう。

第3章 まとめ

今回の調査地点は大きく二つに分けることができる。

一つは、遺跡中央の台地北縁に近い、縄文時代前期の集落の範囲での調査である。第2章第1節の遺構検出状況で述べたように、狭いトレンチ状の調査区にもかかわらず、集落内での住居の密度について、前期初頭の特徴を推定できる資料を得ることができた。

もう一箇所は台地南縁に近い縄文時代中期の集落の中での調査である。中期中葉V期から後葉III期までの密集した集落の一部を発見し、東方では遺構のない範囲も特定できた。

縄文時代中期の住居址は、過去の調査結果を合わせてみると、台地上の南縁側、長さ400mを超える範囲から発見されている。すでに何回かの整地を経たと判断される現地形の上での、道路建設に伴うトレンチ状の調査の集積であり、明言はできないが、想定される溝や微高地などの台地上面の微地形に発見された遺構を重ね合わせると、住居址は、台地上を東西に走る幾筋かの低い尾根の上もしくはその南斜面に展開しているように見受けられる。ただ、その具体像はまだ描くまでには至っていない。

遺構としては220号住居址床面上の、炉とした、土器片を組んだ遺構が注意される。確かに、中越遺跡に於いては、炉縁石として使用できるような石は貴重品だったようで、特に中期後葉の住居址では、最終段階を除き、新しく構築した住居で再び使用する爲なのだろう、ほとんどの家の炉石は廃絶と同時に掘り取られており、まだ大型の掘り炬煙状の炉を造るまでには至っていない段階での簡便な方法として、理解されなくもない。他に例がなく、破損した土器を利用したという点で、見方によっては当時の人々の心の一端までも現れる遺構といえよう。

台地北縁の、縄文時代前期の集落の北側、古くからある宮田から下牧へ抜ける道の東に発見された中世の遺構は特筆すべきものである。残念ながら全体像を知るまでの範囲を調査することはできなかったが、調査した部分だけでも、いくつかの注意される事柄がある。

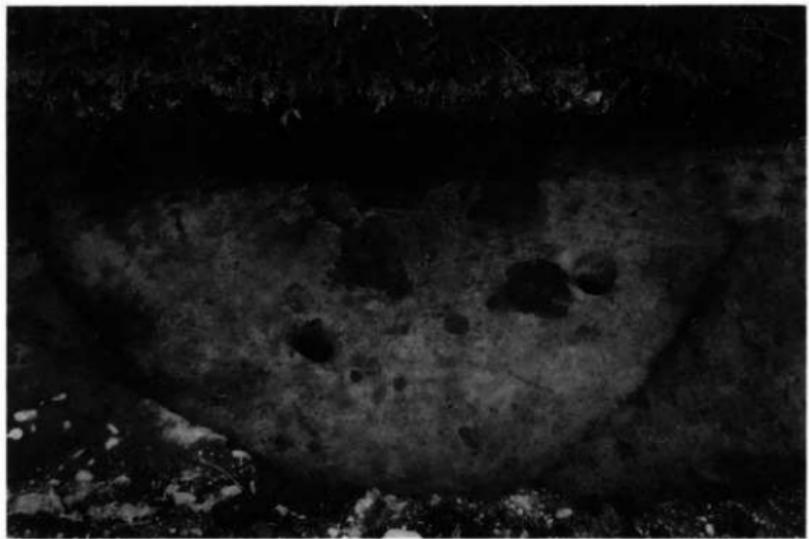
その第一点は、中越遺跡の中で初めて、想像もされていなかった中世の建物址が発見されたこと自体で、土器や溝などを含めて、周囲に同時代の遺構が全く見当らず、そのことがかえってこの遺構の性格を隠めかせている。

性格の異なる2種類の遺構が切り合って発見された点も注意される。掘立柱建物址は、火鉢や天目茶碗などの出土遺物から、居館的性格が強く感じられる。それに対して、それを切っている半地下式建物址は、戦いの場の施設として構築されることが多いということから、遺構を発見した場所の性格自体が、その間に変わったということが推測でき、背景に社会情勢の変化が考えられる。さらにこのことに、半地下式建物址の埋土から類推される廃絶状況（それはかなり劇的なものではなかっただろうか）を合わせると、最末期に戦闘に類する行為もしくは少なくも関連した何らかの行為が想定されなくもない。

写 真 図 版



231号住居址



232号住居址



235・239号住居址



236・238号住居址



237号住居址



240号住居址



218~220號住居址



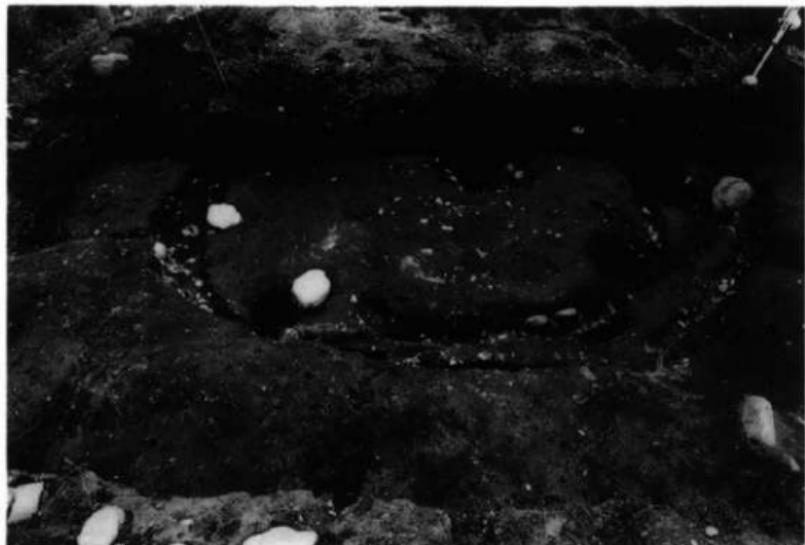
219號住居址爐、埋甕、伏甕



219号住居址 (左: 埋甕、右: 伏甕)



220号住居址 炉 (左: 東より、右: 南より)



221号住居址



221号住居址埋甕（左：新址、右：最新址）



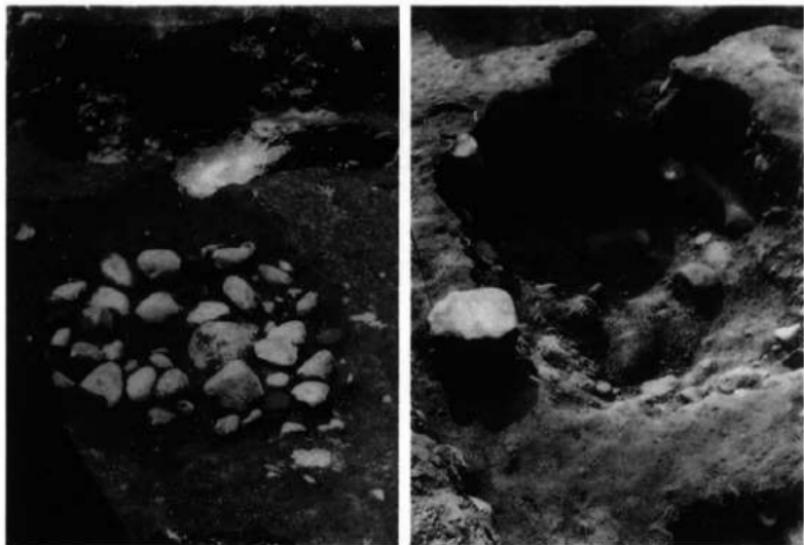
222・224号住居址



224号住居址埋甕



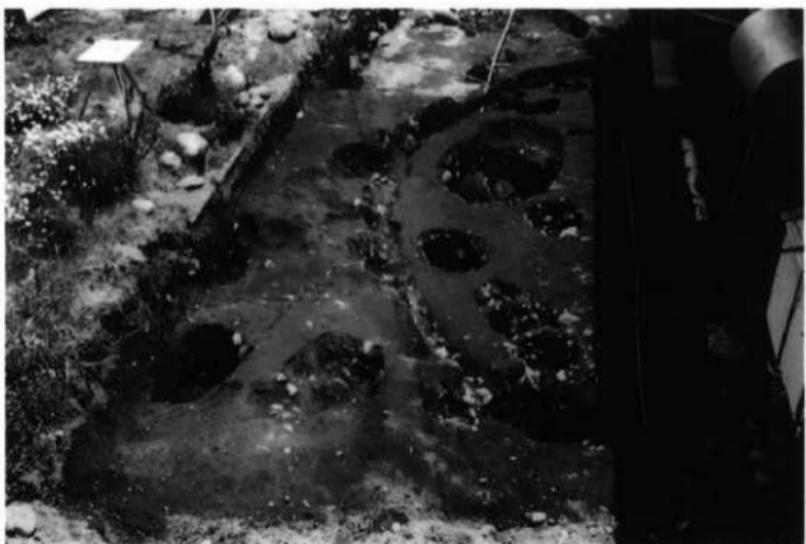
224号住居址石棒と埋設土器



224号住居址炉（左：礫の入る状態、右：掘りあがり）



225号住居址



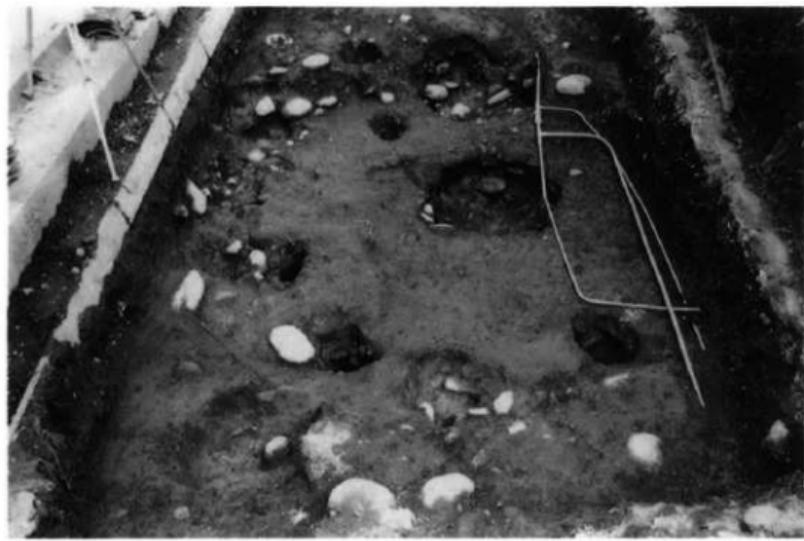
226号住居址



227号住居址



227号住居址炉



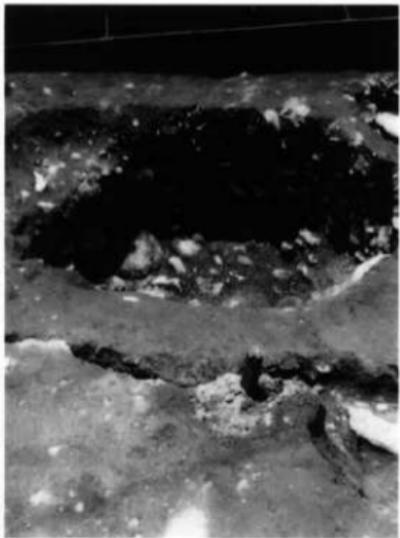
228号住居址



229号住居址



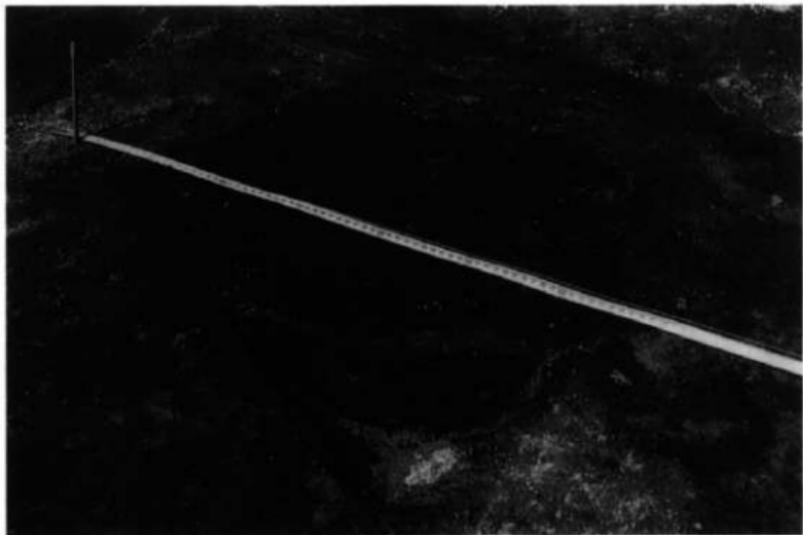
229号住居址炉



226号住居址内土坑



241号住居址と掘立柱建物址（奥）



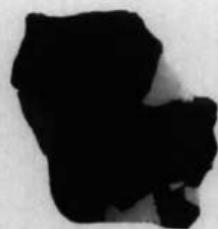
241号住居址炉



1



5



2



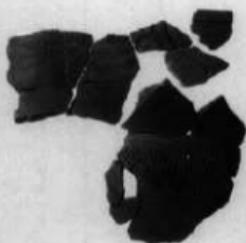
6



3



7



4

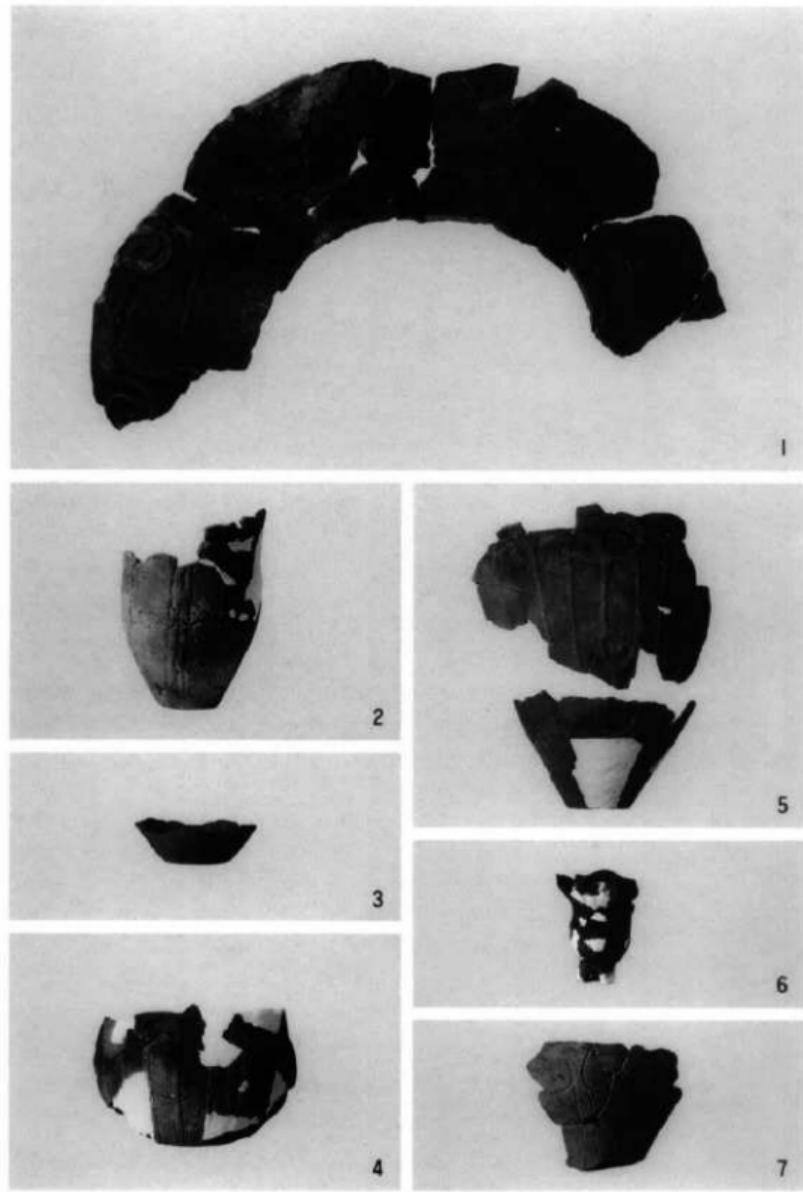


8

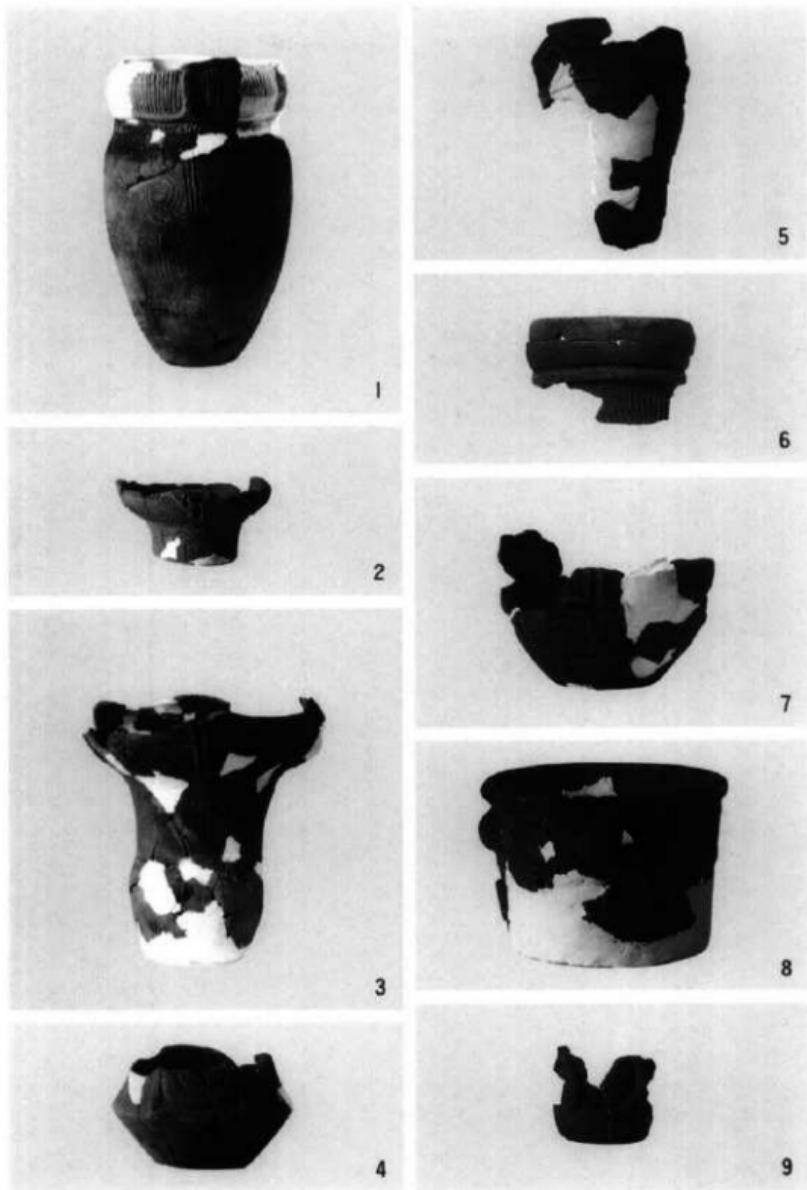


9

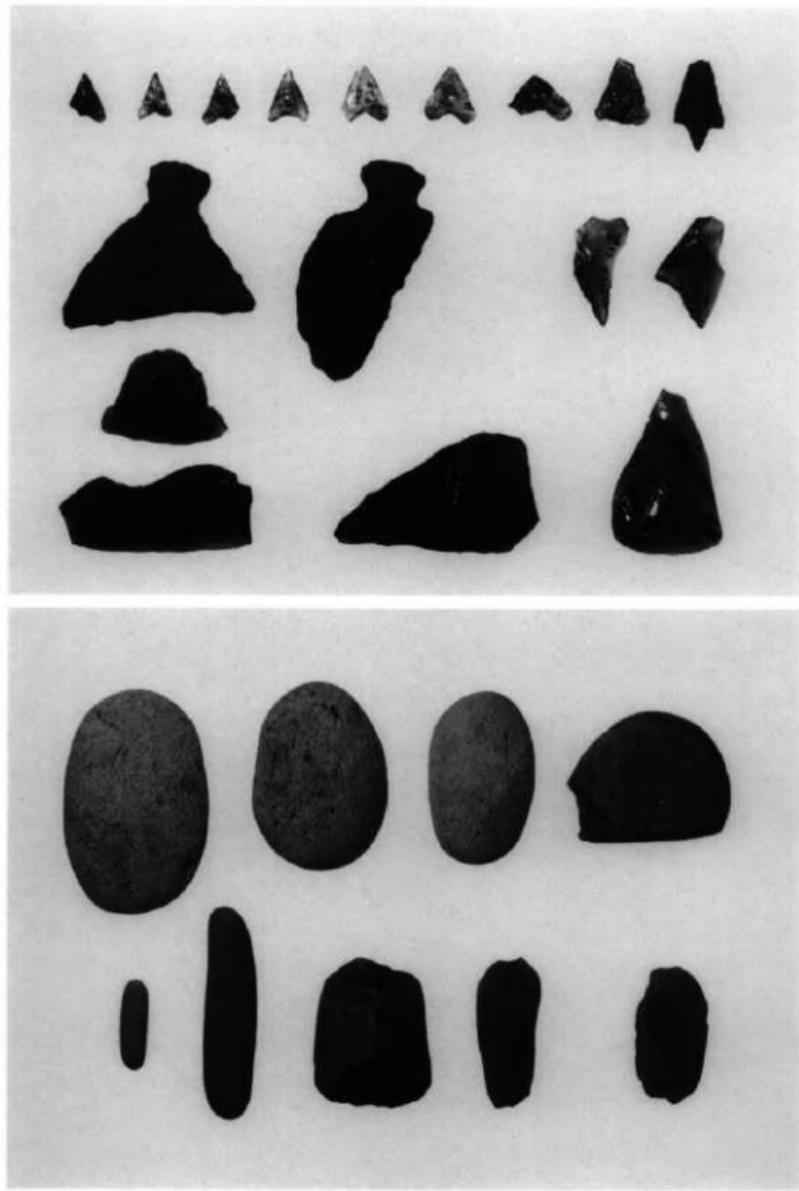
1 231住、2 240住内土坑、3・4 218住、5 219住埋甕、6 219住伏甕、7・8 219住、9 220住炉



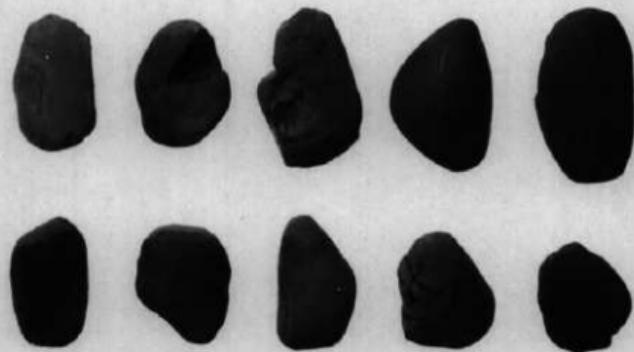
1~3 221住埋甕、4~7 221住



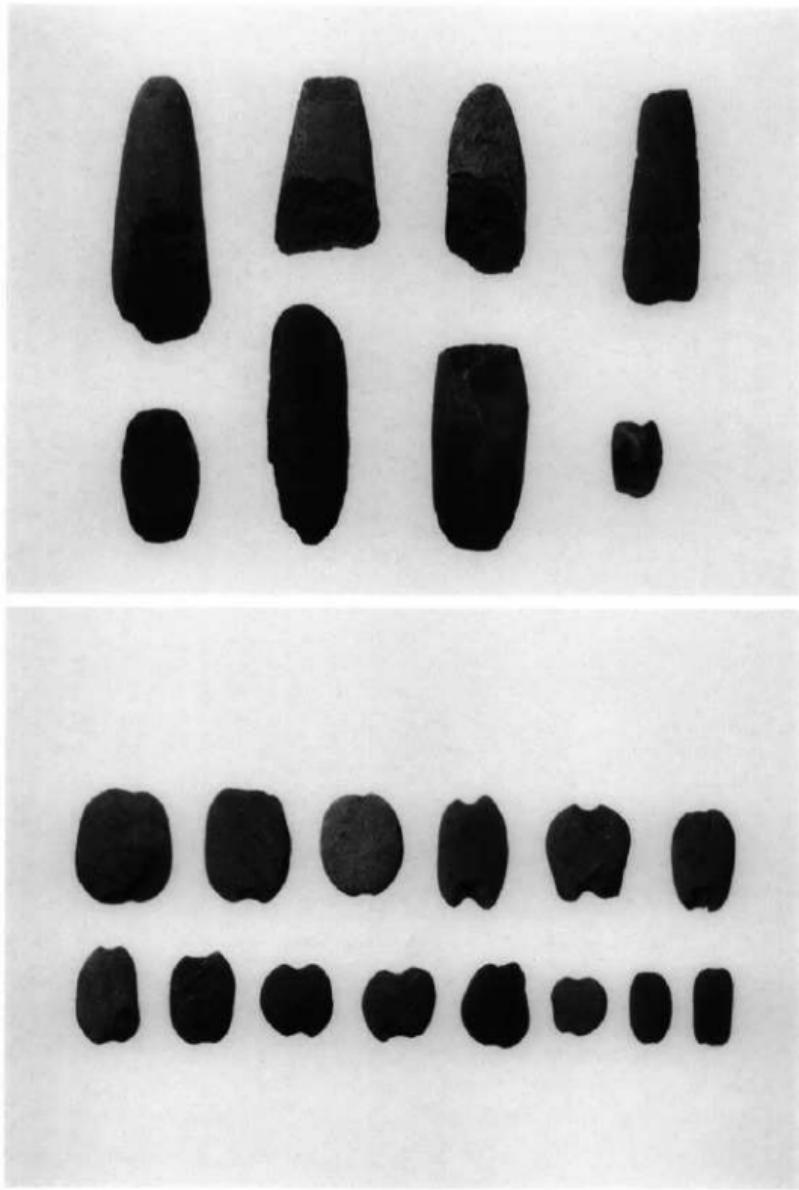
1 224住埋甕、2 224住埋設土器、3 224住、4~6 225住、7 226住、8·9 228住



縄文時代前期の石器



縄文時代中期の石器(1)



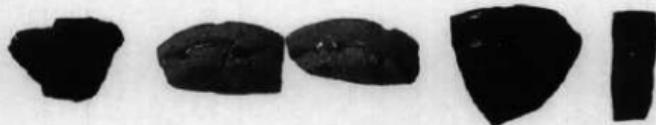
縄文時代中期の石器(2)



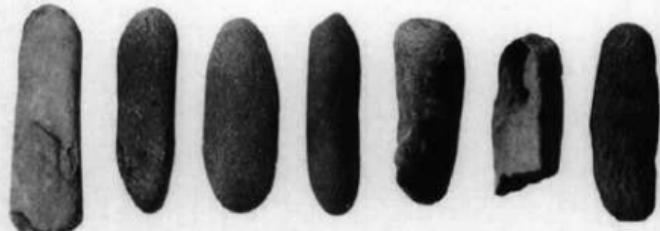
1



2



3



4

1 242住内耳土器、2 241住元祐通寶、3 振立柱建物址、4 242住蓆手石と砾石（右下）

西原土地区画整理事業第1工区
第13次調査報告書①

中越遺跡

平成6年3月15日 発行

発行 宮田村遺跡調査会

印刷 ほおづき書籍舎
長野市柳原2133-5

